

## 遠隔授業で配信した「国際看護学 2010」の有効性と運用上の課題

宮越幸代・太田克矢（長野県看護大学）

【目的】長野県下 8 大学が 2010 年度から大学間を高速ネットワークでつなぎ配信を開始した「遠隔授業」のうち、長野県看護大学が配信した授業「国際看護学」の有効性と運用上の課題を考察した。

【方法】授業者が 2010 年 4 月より合計 15 回配信した遠隔授業「国際看護学」の履修生合計 11 名（学内履修生 9 名・学外履修生 2 名）を対象に、履修生が記述し、提出したレポート課題やアンケート等の内容を質的に分析した。なお、本研究は長野県看護大学倫理委員会での審査および承認（審査番号第 38 号）を受け、対象者には研究の趣旨および倫理的配慮について文書と口頭で説明し、対象者による回答書への直筆署名をもって同意を確認した。

【結果】履修生が本授業に積極的な履修意欲を感じたのは、途上国現地の保健医療や看護技術の実施場面の録画ビデオ視聴や、日本とは異なる看護技術の根拠、他大学や他学部同士の履修生間で行う意見交換であり、それらが「本授業に期待したこと」が「満たされている」という回答の主な理由であった。遠隔授業の最大の利点として複数指摘された点は「他大学や他学部の履修生の多様な意見を聞けること」であった。一方、「期待したこと」が「あまり満たされていない」という回答の理由は、「システムの不具合」や「授業者のシステムに対する不慣れ」、「Web 上で課題を提出する専用学習管理システム（e-Ches）の煩わしさ」などであった。また、「大規模な取り組みの割には履修生が少ない点が残念」という指摘もあった。全 15 回のうち、時間割の振り替えにより他大学の履修生が履修できなかった授業が 2 回あり、当該授業の録画ビデオの視聴と視聴後のレポート提出を課題とした。

【考察】授業者が考える「国際看護学」の内容は人間の発達段階や領域で分類せず、世界の幅広い対象や事象への理解に基づき、既習の知識・技術を応用し「対象に合わせた看護方法を考える力」を養うことをねらいの一つとしている。そのため本授業はリアルタイムの履修を前提とし、学内では出会うことのない履修生同士の積極的な意見交換を授業に組み入れた。このような遠隔授業の特徴を活かした履修生同士の意見交換は、本授業がねらいとする世界の幅広い対象や事象への理解を促す鍵となると考えられた。一方、1 回 90 分間の授業時間内にこのような意見交換を効果的に行うには、システムのスムーズな運用が不可欠である。また、履修生がより幅広い意見を聞き、考える力を養うには、履修生数の確保が必須であり、そのためには希望する学生が希望する授業を選択履修できる 8 大学間の統一的な時間割設定が前提となる。しかし、遠隔地でかつ学部・学科の異なる大学間の時間割調整は難題であり、その対策の一つとしてビデオ履修を活用する方法も考えられるが、活用する際は授業のねらいとの関係を考慮し、効果的な活用方法を検討する必要がある。